

明石の史跡（56）鬼孫・小笠原忠政



明石藩初代藩主の小笠原忠政（忠真）は、その武勇は人口に膾炙されている。その根拠は、慶長20年（1615）5月7日、大坂夏の陣最後の1日、正午頃に真田幸村（信繁）は、茶臼山（大阪市天王寺区）の家康の本陣を攻撃した。すべての武具を赤一色に統一した真田隊3,000余は、家康の馬印を倒し、本陣めがけて突進。敵味方の区別もつきにくいほどの乱戦となる。とはいえ、細川忠興は、「此方の御人数、数多これ有るに付」と勝利を予測したように、午後3時頃までに大坂方は大敗する（細川家記）。

槍奉行であった大久保彦左衛門忠教は、「三方ヶ原にて一度御旗の崩れ申すより外、あとききの陣にも、御旗の崩れ申す事なし」と記している（三河物語）。また島津家久も「（家康の）御陣衆三里ほどづつにげ候衆は、皆々いきのこられ候。三度めに真田もうち死にて候。真田日本一の兵、いにしへよりの物語にもこれなき由」と激賞した（薩藩旧記／二木謙一著『大坂の陣』175頁）。

このとき父小笠原兵部大輔秀政・長兄忠脩（ただのぶ）は討死。次男忠政は、馬上で槍をふるっての奮戦もかなわず、重傷を負う（寛永諸家系図伝4. 184頁-5）。3里も逃避しなかったための結果であろう。家康は2人の忠死をいたむとともに、忠政には治療のために医師を派遣している。

同年閏6月26日、二条城に諸大名を集めて舞楽を興行した時、忠政が出席するまで舞楽をはじめなかった。ようやく姿を見せたとき、家康はみずから忠政の傷を檢視して、「是は我が鬼孫にて侍る」と諸将に紹介し、遅参の理由は、未だ治癒しない傷であることを強く印象づけた（岡谷繁実著『名将言行録』5. 212頁）。

ただ閏6月26日というのは間違いで、舞楽の興業は翌27日のことで（駿府記ほか／史料綜覧15. 115頁）、公家衆も出仕するなかでの「鬼孫」の披露であった。